

青春の爆音

青山七恵

十代の心のねじくれ、白け、悲しみ、諦め、こわばり、寂しさ。そのぜんぶがごっちゃになって、少年がかき鳴らすギターと絶叫の爆音に弾ける「耳を壊して」に胸打たれた。冒頭から一貫して浅い呼吸で、ぶつ切りの言葉がごろんと投げ出されているような文体もいい。壊そうとして、でも勝手に開いていく思春期の耳。ままならぬ現実にも拗ねても悲劇のヒロインにはなりきれない、正直者のいじらしさが光る一作だった。

「栓」は終始緊張感を湛えた文章が連なり、短い枚数ながらどっしり読み応えがあった。常に水浸しになっている奇妙な夢の世界を淡々と描きながらも、ひとつひとつの言葉がしつかり吟味されているのが感じられる。ほのかなズレを残しつつ、暗示的な夢が現実と接続されている点も手堅い。

亡き祖父との思い出が細部まで丁寧に描かれる「夕焼けの約束」は、温かく爽やかな一編。読後に主人公に「がんばれ」と声をかけたくなるのは、記憶のなかの祖父が単なる小説のパーツではなく、生きた人間の体温を持って捉えられているからだろう。

「レモン彗星」は、不思議な女の子との出会いを描くポップな日常小説かと思いきや、予想外の展開を見せ、最後には壮大なSFに。現代社会への警告をはらみつつ、同じ彗星を見上げた飛鳥時代の人々を想う眼差しにも、レモンを絞った牡蠣フライにがつつく食欲にも、この世界への信頼と愛着がみちみちていて、読んでいて心なごんだ。